

ヨナ書

第一章一エホバの言アミタイの子ヨナに臨めりいはく二起てかの大なる邑ニネベに往きこれを呼はり責めよそは其惡わが前に上り來ればなりと三然るにヨナはエホバの面をさけてタルシシへ逃れんと起てヨツパに下り行けるが機しもタルシシへ往く舟に遇ければその價値を給へエホバの面をさけて偕にタルシシへ行んとてその舟に乘れり四時にエホバ大風を海の上に起したまひて烈しき颶風海にありければ舟は幾んど破れんとせり五かかりしかば船夫恐れて各おのれの神を呼び又舟を軽くせんとてその中なる載荷を海に投すたり然るにヨナは舟の奥に下りゐて臥て酣睡せり六船長來りて彼に云けるは汝なんぞかく酣睡するや起て汝の神を呼べあるひは彼われらを眷顧て淪亡ざらしめんと七かくて人衆互に云けるは此災の我儕にのぞめるは誰の故なるかを知んがため去來鬪を撃んとやがて鬪をひきしに鬪ヨナに當りければ八みな彼に云けるはこの災禍なにゆゑに我らにのぞめるか請ふ告げよ汝の業は何なるや何處より來れるや汝の國は何處ぞや何處の民なるや九ヨナ彼等にいひけるは我はヘブル人にして海と陸とを造りたまひし天の神エホバを畏るる者なり〇是に於て船夫甚だしく懼れて彼に云けるは汝なんぞ其事をなせしやとその人々は彼がエホバの面をさけて逃れしなるを知れり其はさきにヨナ彼等に告たればなり二遂に

船夫彼にいひけるは我儕のために海を靜かにせんには汝に如何がなすべきや其は海いよいよ甚だしく狂蕩たればなり二ヨナ彼等に曰けるはわれを取りて海に投げられよさらば海は汝等の爲に靜かにならんそはこの大なる颶風の汝等へのぞめるはわが故なるを知らばなり三されど船夫は陸に漕もどさんとつとめたりしが終にあたはざりき其は海かららむかひていよいよ烈しく蕩たればなり四ここにおいて彼等エホバに呼はりて曰けるはエホバよこひねがはくは此人の命の爲に我儕を滅亡したまふ勿れ又罪なきの血をわれらに歸し給ふなかれそはエホバよ汝聖意にかなふところを爲し給へるなればなりと五すなわちヨナを取りて海に投入たりしかして海のあるることやみぬ一六かかりしかばその人々おほいにエホバを畏れエホバに犠牲を獻げ誓願を立たり七さてエホバすでに大なる魚を備へおきてヨナを呑しめたまへりヨナは三日三夜魚の腹の中にある

第二章一ヨナ魚の腹の中よりその神エホバに祈禱て二曰けるはわれ患難の中よりエホバを呼びしに彼われこたへたまへりわれ陰府の腹の中より呼はりしに汝わが聲を聴たまへり三汝我を淵のうち魚の中心に投げられたまひて海の水我を環り汝の波濤と巨浪すべて我上にながる四われ曰けるは我なんぞの目の前より逐れたれども復汝の聖殿を望まん五水われを環りて魂にも及ばんとし淵我をとりかこみ海草わが頭に纏へり六われ山の

根基にまで下れり地の關木いつも我つしるにありきしかるに
我神エホバよ汝はわが命を深き穴より救ひあげたまへり七わが
靈魂衷に弱りしとき我エホバをおもへりしかしてわが祈なん
ぢに至りなんぢの聖殿におよべり八いつはりなる虚き者につか
ふるものは自己の恩たる者を棄つ九されど我は感謝の聲をもて
汝に獻祭をなし又わが誓願をなんぢに償さん 救はエホバよ
り出るなりと○エホバ其魚に命じたまひければヨナを陸に吐
出せり

第三章一エホバの言ふたたびヨナに臨めり曰く二起てかの大な
る府ニネベに往きわが汝に命ずるところを言ふヨナすなはち
エホバの言に循ひて起てニネベに往りニネベは甚だ大なる邑
にしてこれをめぐるに三日を歴る程なり四ヨナその邑に入はじ
め一日路を行つと呼はり曰けるは四十日を歴ばニネベは滅亡さ
るべし五かかりしかばニネベの人々神を信じ斷食を宣れ大なる
者より小き者に至るまでみな麻布を衣たり六この言ニネベの王
に聞えければ彼位より起ち朝服を脱ぎ麻布を身に纏ふて灰の
中に坐せり七また王大臣とともに命をくだしてニネベ中に宣し
めて曰く人も畜も牛も羊もとも何をも味ふべからず又物を
くらひ水を飲べからず八人も畜も麻布をまとひ只管神に呼はり
且おのおの其惡き途および其手に作す邪惡を離るべし九或は神
その聖旨をかへて悔い其烈しき怒を息てわれらを滅亡させざらん
誰かその然らざるを知らんや○神かれらの爲すところをかんが

み其あしき途を離るるを見そなはし彼等になさんと申し所の
災禍を悔て之をなしたまはざりき

第四章一ヨナこの事を甚だ惡しとして烈く怒りニエホバに祈り
て曰けるはエホバよ我なほ本國にありし時斯あらんと曰しに非
ずやさればこそ前にタルシシへ逃れたるなれ其は我なんぢは
矜恤ある神憐憫あり怒ること遅く慈悲深くして災禍を悔たま
ふものなりと知はなり三エホバよ願くは今わが命を取たまへ其
は生ることよりも死るかた我に善ればなり四エホバ曰たまひけ
るは汝の怒る事いかで宜しからんや五ヨナは邑より出てその東
の方に居り己が爲に其處に一の小屋をしつらひその蔭の下に坐
して府の如何に成行くかを見る六エホバ神瓢を備へこれをして
發生てヨナの上を覆はしめたり七ヨナは首の爲に庇蔭をま
うけてその憂を慰めんが爲なりきヨナはこの瓢の木によりて
甚だ喜べり七されど神あくる日の夜明に虫をそなへて其ひさご
を噛せたまひければ瓢は枯たり八かくて日の出し時神暑き東風
を備へ給ひ又曰ヨナの首を照しければ彼よわりて心の中に死る
ことを願ひて言ふ生ることよりも死るかた我に善し九神またヨ
ナに曰たまひけるは瓢の爲に汝のいかる事いかで宜しからんや
彼曰けるはわれ怒りて死るともよろし○エホバ曰たまひける
は汝は勞をくはへず生育ざる此の一夜に生じて一夜に亡びし瓢
を惜めり二まして十二萬餘の右左を辨へざる者と許多の家畜
とあるこの大なる府ニネベをわれ惜まざらんや